

保護者を支える学校の在り方 —教育相談・特別支援の視点を加えた学校ガイドブック作成を通して—

所 属：八王子市立別所小学校
氏 名：鶴 田 麻 也 美
派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：保護者連携・教育相談・特別支援・学校ガイドブック

I 研究の目的

1 研究の必要性

現在、子育ての不安や悩みを相談する相手がいないと感じている保護者は20%を超えている¹。そのため、子供にかかわる様々な問題を自身で解決できず、学校に訴えとして持ち込む現状がある。一方、教員は、保護者からの訴えにうまく対応できず、多くを「相手の勘違いである」「いいがかり」だととらえてしまう。さらに、保護者からの訴えを「良い意見が聞けるかもしれない」と考える人は他業種に比べ格段に少なく、むしろ身構えてしまう傾向にある²。こういった教員の意識と保護者の思いがすれ違い、関係を悪化させていると考えられる。以上のことから、保護者との信頼関係を築いていくためにも学校—保護者間の関係改善における研究は急務であるといえる。

2 課題の明示

教員と保護者の相互理解は、等身大の互いの姿を理解しあうところから始まる。しかし、現実はそのができずにトラブルが起こっている。自校では教育相談や特別支援、福祉にかかわることが関係悪化の引き金になることが多い。学校便り等でこれらの情報が掲載されていても、そのときに必要な情報でなければ保護者は処分してしまう。そこで、必要なときに使える学校や子育てに関する情報源があることで、保護者の学校に対する不安感や不満感を軽減できるのではないかと考えた。また、教員も保護者の不安を理解することで、よりよい関係を築く土台ができるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、教員と保護者が相互に理解し合うことを目的とし、学校ガイドブックを保護者と教員が協働で作成する。ガイドブックの掲載内容は、保護者自身が必要だと考えた情報を教員とともに編集し、決定することとした。学校ガイドブック作成に当たり、

- ① 必要な会議（以下「ナビ会議」という）の持ち方と工夫
- ② ナビ会議参加者（保護者と教員、以下「ナビ委員」という）の意識の変容
- ③ 学校ガイドブック作成を巡る教員の意識を明らかにしていく。

II 研究の方法

学校—保護者間の理解を促すための学校ガイドブックを保護者主体で作成する。保護者と教員が協働して「ナビ会議」を開き、必要な情報を協力して集め整理していくこととした。学校ガイドブックは、等身大の学校—保護者の相互理解を大きな目的とするが、特に自校で苦慮している特別支援教育と教育相談、福祉的支援を視点の一つに加えて、それらの理解を促す情報を取り入れることにした。そのため、適宜外部協力者を加え、保護者と教員で作成していく。また、学校ガイドブックを作成する際生じた教員の意識と保護者の意識を考察し、作成における配慮点を提案する。

III 研究の結果

1 学校ガイドブック作成のねらい

- 保護者が等身大の学校を理解するために、保護者が知りたいことを出し合い保護者と教員とで協働して作成する
- 教員が保護者は学校の何に困っているのかについて知る
- 家庭支援につながる情報を盛り込み、特別支援教育や教育相談への理解を促す
- 保護者と教職員と地域の支援者が作成することを通して、自身や互いの役割を理解する

2 ナビ会議概要

- 第1回 ナビ委員の親交 ガイドブックイメージの共有
- 第2回 困ったことを出し合う
- 第3,4回
これまでの内容のカテゴリー分け 順位付け
- 第5回 ガイドブックの名称決め 内容確認

¹ 財団法人子ども未来財団「子育て中の母親の外出等に関するアンケート」(2004)

² 関根真一 日本苦情白書(2009)

3 学校ガイドブック掲載内容（一部抜粋）

インデックス	主な内容
学校	学校目標／学校のきまり／生活時程／等
学習	必要な学習用具／記名の必要性 等
給食	給食当番／給食指導／アレルギー対応
保健	保健室の利用方法／出席停止／指導 等
学校行事	運動会／学芸会／校外学習 等
子育て	教育相談／メンタルサポーターの活用等
特別支援	発達障害／特別支援教育 等
保護者活動	保護者と教職員の会 等
その他	忘れ物／放課後託児／写真販売／親同士のコミュニケーション／放課後の遊びの約束 等

4 学校ガイドブック作成会議を促進させる工夫

工夫1「ガイドブックのイメージの共有化とコンセプトの明確化」 簡単な文章で書いてあるもの、ふりがなの必要性、活用しやすい見出しの必要性が出された。

工夫2「呼び水になる具体例」 学校での困り事をより多く保護者に出してもらうために、共感してもらえらる具体例を出した。これにより、8人の保護者が20分間で150という困りごとを引き出すきっかけとなった。

工夫3「ファシリテーターの心構えとして効果的であったこと」

- ① どのような意見でも好意的な関心を示すこと
- ② すべての人に発言のチャンスを公平に与えること
- ③ 具体的で的確な例示ができるモデルであること
- ④ 出欠を問わず全員にレジュメと記録を1週間以内に送付すること
- ⑤ 開始時間と終了時間を厳守すること

工夫4「保護者が活発に意見交換を行うための手立て」

- ① 相互理解を深めるためのチェックインエクササイズ
- ② 安心して会議に参加できるグラウンドルール
- ③ 誰もが意見を出せる会議の工夫
- ④ メーリングリストの活用

5 学校ガイドブック作成・発行を巡ってみられた教員の姿

(1) 2%の無理難題に身構える教員の姿

保護者から出された困り事のほとんどが学校で簡単に改善が図れるものばかりだが、一部苦情・無理難題と思われるものもあった。(3件、全体の2%程度) この無理難題こそ、所属校教員が「恐怖」を感じていた原因である。無理難題に過剰に身構える教員の姿に、保護者は「受け入れてもらえない」と感じている。

(2) 「学校」のことを保護者が口にすることにに対する不安

ナビ委員と協働して学校ガイドブックを作成すれば、保護者が都合良く学校に文句を言う、という恐怖感が強く職員室にあった。その背景として、保護者対応で傷ついた教員も少なからずおり、保護者の学校に向けた発言に恐怖感をもっているためだと考えられる。保護者とともに協働して学校を改善していくという「理屈」は理解できてもその恐怖感は強烈なものがあり、その防衛行動として保護者と協働しても「意味はない」とする行動に出ていると思われる。

(3) ガイドブックの作成によって統一規格を強要される不安

「学級（学年）のきまり」は担任の学級経営や子供観と深く関連しており、学校の全体像を伝えるガイドブックに掲載にはそぐわないと考えていた。しかし、保護者は学級のルールがわかりやすいことをのぞみ、学級間のルールの違いをなくしたいと考えた。これにより教員は統一規格を強いられるのではないかという不安感をもった。

IV 考察

1 ナビ会議参加後の保護者の意識

ナビ会議では、ひとつのテーマにそって協働で作業を行いつつ、学校への前向きな思いを語り合う場となった。その会議を通して、保護者は改めて学校について困っていることやわからないことが多いことに気づき、それを解決することに「あきらめている自分」に気付いた。また、ナビ委員の人柄に触れ、共感的に相手の意見をとらえられるようになっていった。子供の学年にとらわれず、保護者が仲間作りを行う場にもなっていった。保護者の意見の中にも、学校が歩み寄ろうとしている姿に共感する声が上がっていた。

2 校長のリーダーシップが支える校内体制

教員が保護者と相互理解していくための一つの方法として、学校ガイドブックを提案した。この学校ガイドブック作成を行う際に大切になるのは、教員が保護者の学校に対する困りごとを共感的にとらえることである。しかし、教員の中にはあらゆる保護者を好意的に受け入れ、その意見を聞くことに強い抵抗感を示すものはいる。今回の作成をもとに、学校ガイドブック作成を円滑に進めるポイントとして、校長のリーダーシップが大変重要であることがわかった。校長の指揮下で、保護者と教員の相互理解に必要性を感じる教員と保護者が集まることで、学校ガイドブック作成は円滑に進むといえる。